

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究活動の成果を生かしながら、「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「うれしのタイム」は、自発的な活動としての遊びの中で、自分をコントロールする力や最後までやり抜く粘り強さなどの幼児期に育てたい力を培う重要な活動であることを再認識し、研究テーマとの関連で、日々の保育の記録を基に継続して事例収集と検討を行うことで、環境を整えていった。 三年間の教育課程をもつ幼稚園として、三年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、教員間での保育観や子供観の共有に向けて学期ごとに点検を行った。 園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解するとともに、行事後には、保護者アンケートも参考にし振り返りを行い、次年度につながるようにした。 	A		<p>◇「教育研究活動」についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「うれしのタイム」の自発的な活動としての遊びを通じた教育を大切にしたい。 3年保育のよさ、年齢ごとの育ちが見られるので、さらに充実した保育をしてほしい。
	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> キンダーガーデン・カウンセラーに、各クラス学期に2～3回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受たり、保護者の相談へとつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。キンダーガーデン・カウンセラーからのアドバイスが記載された記録を必要に応じて閲覧したり、全職員参加の園内委員会（年3回）を開いたりし、情報が共有できるようにした。個別の支援計画は、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにしている。 就学に向けて、希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。また保護者からの進学相談にも担任や管理職があたり、就学予定校や加東市保健センターとも連携を図った。 今年度より、「合理的配慮をふまえた個別支援の在り方に関する具体的な方策案WG」を立ち上げ、附属三校園と大学教員のメンバーで、今後の附属三校園の支援の在り方について検討を進めている。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育の支援員を配置できるように大学へ要望していくべきである。 幼稚園と小学校の両カウンセラーが互いの学校園を行き来し、支援の在り方を情報共有をしていることは評価できる。今後も継続するとともに、回数を増やしてほしい。 カウンセラーが登園時に幼稚園の玄関付近にしていることにより、保護者が直接相談をしやすい環境になっていることは評価できる。
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員間で幼児のよさを共有し、保育の質を高めることを目的とした、研究テーマ「保育の質を高めるためにー記録から幼児のよさを共有するー」（一年次）を追求する。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の目的を「保育の質を高めるために」とし、幼児を理解し幼児のよさを伸ばす目をもつこと、全職員で幼児のよさや育ちの可能性を共有すること、個のよさが生かされる保育の展開を考えることを目指した。研究の方法として、幼児理解の仕方や関わり方に戸惑い、悩んでいる幼児の姿などを記録にとり、その記録をもとに職員間で話し合いを重ねた。 研究一年次の成果として、以下の3点が挙げられた。①気になっていた幼児の行動が、様々な見方やとらえ方を出し合っていくことで、次第に肯定的に読み取れるようになった。②幼児理解が変わってくることで、その幼児の行動に込められた思いや意味を探り、幼児に合った関わり方や環境を考えることができるようになった。③繰り返し職員間で話し合うことで、他の保育者の幼児のとらえ方や関わり方も知ることができ、自分の保育に生かしていこうとするようになった。 	A		
	<p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施するとともに、子育て環境をよりよくするための取り組みを行い、子育て支援事業の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度より、就労支援として、保育時間終了後及び長期休業中の預かり保育を実施した。登録者数は10名であった。「アフタースクール」利用者との交流も行うなど、活動内容の工夫も行った。 子育て環境をよりよくするための新たな取り組みとして、附属小学校の参観及び懇談日に、一時預かり保育を実施した（1回目は7月、利用者は29名、2回目は3月、利用者は30名）。また、複数在園児の場合の保育時間差に対応し、親子で弁当を食べたり遊んだりする時間と場を「ばんだルーム」として園内に確保した。一回につき、2～5組ほどの利用があった。同様にやまぐにプラザの子育て支援ルーム「GENKI」利用者と同様におきょうだいがいる場合も、「GENKI」内の「ばんだルーム」で過ごすことができるように連携を図った（登録者は4名）。これらの取り組みは、利用保護者から好評を得ている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 預かり保育は、次年度より、就労支援に加え、就学、介護等も対象とするとともに、幼稚園の代休日も実施することで、子育て支援事業をより充実させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後利用者が増えることを見越して、落ち着いた場で保育ができるよう場所の確保を行ってほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
地域への貢献	<p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間を通して実施するとともに、子育て支援ルーム「GENKi」とも連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。 <p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 年2回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」の回数を昨年度より増やして、年16回実施した。年間の登録者数は、79組（2月現在）である。活動時間は約2時間で、活動の前半は「うれしのタイム」で在園児と共に遊び、後半は遊戯室において、クラス単位で在園児や保護者有志と共にする活動、園長、副園長による子育てフンポイント、触れ合い遊び、大学院生によるパネルシアターなど内容を工夫した。 P T A活動の活性化のため、手芸部の活動をやまくにプラザ「なんでも相談室」で行えるようにした。そのことにより、手芸部が子育て支援ルーム「GENKi」利用者に手提げ袋等の作り方を伝授する等の交流ができるようになり、場と人材の活用の相乗効果が見られた。 	A		◇「地域への貢献」についての自己評価は妥当である。
他校種（小・中・高校・大学）との連携	<p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 5歳児がスムーズに就学できるように、附属小学校児童の通学班と共に、親子での通学体験（3月に2回実施）に加え、今年度は、幼稚園児用に給食用の食缶を購入し、5年生に準備と片付けを手伝ってもらいながら附属小学校の多目的室で給食体験を行った（1月と2月の2回）。 附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。 附属中学校との交流では、4、5歳児と3年生間で、中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参したり、一緒に遊んだりした（7月と9月）。 県立社高等学校との交流では、1年生が「触れ合い育児体験」として、園児と一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒が集団行動を見せたりした。 教員間の連携として、三附属連携推進協議会において、三附属の教員が各部会に分かれ、情報を共有したり、互いの意見を交換し合ったりした。また、1月末に行われた附属小学校の研究発表会では、本園職員が7名参加し、授業参観等を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 今後も5歳児が就学への不安を解消し、スムーズに移行できるように、附属学校間の連携を密にしていきたい。 	◇「他校種（小・中・高校・大学）との連携」についての自己評価は概ね妥当である。 <ul style="list-style-type: none"> 幼稚園での体験が小学校のカリキュラムにどうつながるのかを可視化し、幼稚園、小学校の接続期のカリキュラムを早急に作成してほしい。また、幼稚園・小学校の教員同士の連携も積極的にすすめてほしい。
	<p>○実地教育(教育実習)</p> <ul style="list-style-type: none"> 初等基礎実習の在り方を改善し、より効果的な実習を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度に教育実習総合センターとともに「初等基礎実習WG」を立ち上げ、担当者や管理職参加のもと、実習の内容・方法の改善を図り、学生の記録ノートの精選を実現したことで、より効果的な実習を行うことができた。 各クラスで行う反省会に大学教員が参加し、大学のリフレクション（授業）と連携をもたせ、より効果的な振り返りを行い、次に生かせるようにした。 実習生には、実習後も本園の研究発表会への参加（大学の授業「教職実践演習」の一環）並びに生活発表会等の園行事の参観を呼びかけ、多くの参加者があった。 	A		
	<p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼年教育・発達支援コースの大学教員には、本園の保育の質の向上と研究推進のために、園内研での指導助言や研究発表会の講師やオブザーバーとしての参加を得た。 3・4歳児の親子活動（各年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いのよい機会となった。陶芸活動は、ここ数年大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な体験となるよう、大学構内散策や食堂で昼食をとる機会も設けた。 	A		